

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 18 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2016

課題番号：24520840

研究課題名(和文) 聖杯から見るフランス革命期の神聖性と公共性の変容

研究課題名(英文) The sacred vases, as an index to the change of the sacredness and the religious publicity in the period of the French Revolution

研究代表者

松島 明男 (Matsushima, Akio)

北海道大学・文学研究科・准教授

研究者番号：20306210

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：フランス革命中に行われた教会の聖具類の国有化と再利用を手がかりに、フランスの各県文書館に収蔵されている未利用の手稿史料を活用し、フランス社会で生じた神聖性と公共性の変容を明らかにすることを主たる目的とした研究計画であった。しかし、転職や体調等の理由による研究計画の遅延に加え、フランス本国での過激派によるテロ多発の結果、実地調査のスムーズな実施が困難となった。結果的に、計画された調査を実施することはできたものの、議論の柱となる史料を見出せなかったこともあって、発表できた研究業績は派生的なものに留まった。具体的には、単著『図説ナポレオン』(河出書房新社)と論文「礼拝の自由を護るのは誰か」である。

研究成果の概要(英文)：Using the manuscripts of the Departmental Archives of France as the historical sources, the aim of the research project had been to make clear the movement of the nationalization of the sacred vases of the Catholic churches during the French Revolution. The result of the movement had changed the sacredness and the religious publicity in the French society. But the researches at the Archives became difficult as a result of the terrorism by radical in France. The change of occupation and physical condition affected the delay of the study. The research work was done and the manuscripts was found but no time was left to accomplish the analysis. Concretely, there are only two peripheral achievements, the illustrated Napoleon (Kawade Shobo Shinsha) and the article "Who maintains the freedom of worship?"

研究分野：歴史学

キーワード：西洋史 ヨーロッパ近代史 宗教的自由 フランス革命 カトリック教会 没収済国有財産

1. 研究開始当初の背景

日本はもちろん、フランスの歴史学でも、革命期に行われた宗教政策の実態を、史料に依拠して実証的に明らかにする試みはなされたことがなく、未解明のままである。特に、政府が財政赤字解消の一助とすべく推進させた、カトリック教会の貴金属製聖具類の国有化と没収、その後の再利用については、研究はまったく行われてこなかった。結果的に、革命の中で目立つ存在である議員やサンキュロットら、カトリック教会に改革を強要した側の主張ばかりが研究され、礼拝の場を脅かされた教会や信徒の立場や考えは、先行研究によって無視されてきたのである。

2. 研究の目的

フランス革命は、今日のフランス社会の非聖化、すなわち公共圏の宗教的中立を確保するために、公共圏から宗教的な存在を一切排除する政策が行われた点で、時代の画期である。結果として、日本では「政教分離」と呼称されている社会のあり方の発端となった。本研究では、その冒頭の時期を対象に、同時代に作成された未利用の手稿史料を収集して分析することにより、礼拝の現場で起きていた転換を明らかにすることを目指したものであった。

フランス革命史上、旧体制の支柱として敵視され、革命勢力の攻勢を受けて多大な打撃を蒙り、弱体化して、その後、絶対王政期の隆盛を回復することはなかったカトリック教会は、いわば歴史の「敗者」と言える。教会と信徒が経験した革命、特にそれによって引き起こされたフランス社会における「聖性」の変容を明らかにし、忘却の中に留まる「敗者」に強いられた変化を明らかにすることで、今日に至る歴史的転換の実像を見出そうとするものである。

3. 研究の方法

本研究計画では、フランス革命中に行われた教会の動産類の没収と国有化を、フランスの各県文書館に収蔵される没収に際して作成された行政文書を現地調査し、その実像を明らかにする。特に、教会の動産類没収の実務を担ったのは、現在の郡に当たる地方自治体ディストリクトであった。その作成した史料が作成から数年後にディストリクトが郡に改組された時点で県に移管された。それらは、その後、県庁で利用されずに保管されたため、今日でもなお作成時の良好なコンディションが維持されている。それらを利用することで、各地域の違いを含めて、有用な情報が得られるはずであった。なお、地域的にケルト的周縁という特徴を持ち、同時に史料の残存状況も良好であるブルターニュ地方四県の調査を中心に据え、合わせてリヨン等大都市でも史料調査を行い、地域的な比較を行う。

4. 研究成果

研究代表者の転職に伴う転居と健康状態の不振、さらにはフランス現地における大規模な銃乱射テロの勃発とその後の社会の不安定化が相ついで生じ、本研究計画の順調な推進は妨げられた。特に、予定されたスケジュールで現地調査を行うことは困難であった。また、現地の実地調査で収集できた史料は豊富であったが、史料の性格として没収品の数値的な記録が中心であった。そのため、研究の主たる目的である「聖性」に生じた変容を記録し、社会史の視点からの研究に寄与する良質な史料群を見出すことが困難であった。

結果的に、研究目的と調査している史料の間に乖離があることを自覚するようになった。ところが研究期間内には、研究業績として調査結果をまとめて発表するために、正しい方向性へと研究計画を軌道修正する

ことができずに終わった。

ただし、研究計画の終わりに実施したローマ教皇庁のヴァチカン公文書館での調査により、一定の可能性と新たな方向性を見出すことができた。それまでは、フランス革命期に行われた動産類没収と国有化は、革命期に生じた社会の急激な変化に起因する革命固有の現象であると考えていた。しかし、教皇庁での調査により、非常によく似た先行例がルイ 13 世期にもあることが判明した。結果的に、教会動産没収と国有化という現象が、革命期に新たに出現したものであると考えていたのが誤りであって、その誤った枠組みで研究を進めたことが、なかなか成果をまとめられない結果を招いていたことを自覚させられた。

むしろこの問題は、革命の断絶を越えて、絶対王政期から継承されたフランス国家と教皇庁の対立構造の一部が、革命によって急激に規模を拡大して全国に波及したものとして捉える必要があったのである。

残念ながら、ヴァチカン公文書館での調査は 2017 年 3 月に実施したものであった。そのため、新たな認識に依拠した研究を行い、その成果を論文にまとめるだけの時間は残されていなかった。しかし、今回の研究計画の育んだ果実として、近いうちに論文にまとめて、科研費による研究成果として公表したいと考えている。

結果的に、本研究計画の実施期間中に発表できた研究業績は、いずれも本研究計画の中心的なテーマによるものではなく、周縁的な内容のものに留まることになった。ただし、それらは難航する本研究計画を推進する中で得られた知見や部分的な成果をまとめたものであり、どれ一つを取っても、本研究計画とそれに対する科研費の支援なくしては存在しえなかったものである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 6 件)

1. 松嶋 明男「書評 中野智世ほか編『近代ヨーロッパとキリスト教 カトリシズムの社会史』」、『史学雑誌』、掲載決定、2017 年、査読あり。
2. 松嶋 明男「書評 服部春彦著『文化財の併合：フランス革命とナポレオン』」、『史学雑誌』125 巻 7 号、1314-1323 頁、2016 年 7 月、査読あり。
3. 松嶋 明男「書評 小田中直樹著『一九世紀フランス社会政治史』」、『史学雑誌』124 巻 7 号、1342-1349 頁、2015 年 7 月、査読あり。
4. 松嶋 明男「ブルターニュ地方 4 県の県文書館における実地調査」、『日仏歴史学会会報』30 号、35-43 頁、2015 年 6 月、査読あり。
5. 松嶋 明男「第四章 礼拝を護るのは誰か」、山崎耕一編『フランス革命史の現在』、山川出版社、111-142 頁、2013 年、査読あり。
6. 松嶋 明男「2012 年の歴史学会 - 回顧と展望 - ヨーロッパ 近代 フランス」、『史学雑誌』122 巻 5 号、336-343 頁、2013 年 5 月、査読あり。

[学会発表](計 3 件)

1. 松嶋 明男「フランス近代宗教社会史の視点からの批評」(「近代ヨーロッパとカトリシズム」第 25 回研究会「近代ヨーロッパ史における宗教研究の意義を考える『近代ヨーロッパとキリスト教 カトリシズムの社会史』(勁草書房、2016)を手がかりに」)招待講演、明治大学駿河台キャンパス(東京都千代田区)、2017 年 3 月 29 日。
2. 松嶋 明男「宗教的自由 その転換点と

して 1789 年に注目する」(近世・近代移行期世界経済史研究会)招待講演、関西大学千里山キャンパス(大阪府吹田市)、2016年2月20日。

3.松嶋 明男「フランス史との出会い、重なりあう軌跡」(深沢克己教授退職記念・公開談論集会 歴史・交流・他者)招待講演、東京大学文学部(東京都文京区)、2015年3月21日。

〔図書〕(計1件)

松嶋 明男『図説ナポレオン 政治と戦争フランスの独裁者が描いた軌跡』河出書房新社、2016年。

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等：特になし

6. 研究組織

(1)研究代表者

松嶋 明男 (MATSUSHIMA, Akio)

北海道大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：20306210